

第59号

編集発行

国営土地改良事業地区
営農推進対策連絡委員会
(編集事務局:九州農政局農村振興部農地整備課)

〒860-8527 熊本市西区春日2丁目10番1号
096-211-9111 (内線4773番)

21世紀の基盤整備と営農

ラインナップ

1面/九州管外の畑地かんがい営農取組地区を訪ねて
(茨城県石岡市八郷地区)、八郷地区の概要

2面/取材1 地域農業を支える取組に挑戦

3面/取材2 新規就農者の育成に向けた有機栽培研修制度
「ゆめファーム」

5面/取材3 じっくりと時間をかけ、長ねぎ栽培を安定させていく

6面/取材4 研修が終わったらこれから本番!ハウス栽培を軌道にのせる

7面/取材5 家族で安全・安心な有機栽培に挑戦

8面/九州管内の畑地かんがい営農取組地区を訪ねて、大野川上流地区
若手農業者との意見交換会、都城盆地地区スマート農業の取組



新規就農者への取材風景

取材は10月27日に行い、営農推進の取組を行っているやさと菜苑(株)、有機栽培研修制度「ゆめファーム」の他、新規就農者の皆様へ畑地かんがいの効果等を伺ってきました。

そのため、研修会を予定していた茨城県石岡市の八郷地区の関係機関の皆様にご協力頂き、事務局で、取材を行いました。

九州農政局では、例年、九州管内の国営畑地かんがい事業地区の営農推進担当者が参加する「国営土地改良事業地区営農推進担当者研修会」(以下、研修会)を開催していますが、今年度は、新型コロナウイルスの拡大防止の観点や参加予定者の意向を踏まえ、中止しました。

八郷地区の概要

茨城県石岡市に位置する八郷地区は、国営石岡台地総合かんがい排水事業の受益地です。

八郷地区は、茨城県のほぼ中央、都心から約70kmの距離に位置しています。筑波山の東に位置し、周囲を三方山々に囲まれた盆地状の地形のため、平地が少ない中山間地帯です。

気候は温暖で、年間平均気温が約13℃で朝晩の寒暖差が大きい地区です。1970年代から80年代にかけては、水稲、なし、かき、豚、葉たばこ、しいたけ、養蚕等が作付・生産されていました。1990年代以降は、豚、葉たばこ、しいたけ、養蚕等は減少し、有機野菜を含む野菜類の作付けへ転換しています。



石岡市の位置

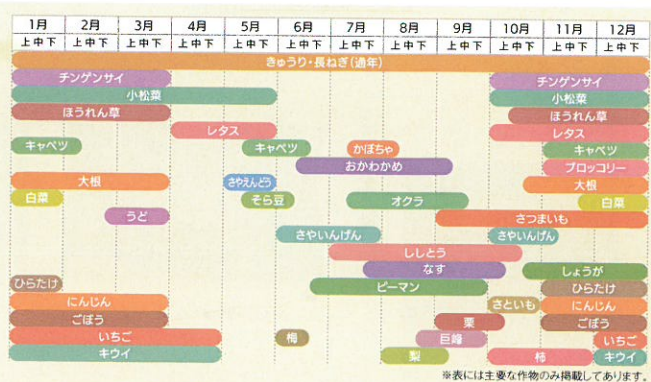
国営石岡台地総合かんがい排水事業

工 期: 昭和45年~平成元年

関係市町: 茨城県 小美玉市、石岡市、笠間市、かすみがうら市、茨城町、鉾田市、行方市

受益面積: 7,405ha

概 要: 農業用水の安定的な確保と供給を図るため、霞ヶ浦を水源に、揚水機場、用水路を整備。併せて、農地造成、区画整理を実施。



野菜・果物の旬の時期 (JAやさと)

事業概要

九州管外の畑地かんがい営農取組地区を訪ねて
(茨城県石岡市八郷地区)

取材1 地域農業を支える取組に挑戦

やさと菜苑(株)

代表取締役 高橋 大氏

設立経緯

やさと菜苑(株)は、やさと農協(以下、JAやさと)が主となって、平成24年8月に設立した農業法人です。

設立に当たっては、地元地権者や行政から「まもなく農業を辞める予定だが、農地が心配だ。」「地域内の遊休農地や耕作放棄地が増えてきた。」「地域そのものの人づきあいが希薄になってきた。」といった声を受け、地域農業を支え地域の要になれるように、自らが直接農業経営に参画する組織を設立しました。

また、新規就農希望者から、「一人でも農業者になりたい。」「慣行栽培、大規模栽培、施設栽培をやってみたい。」といった声もあり、地域農業活性化のため、農業経営のみでなく、研修生を受け入れ、新規就農者や地域後継者を育成することとしました。

後述するゆめファームでは、有機栽培の研修を行い、やさと菜苑では慣行栽培や施設栽培の研修を行い、八郷地区で新規就農希望者の幅広い

要望に応えられる体制を作ってきました。

やさと菜苑(株)の概要

役員：3名(JAやさと組合長、JAやさと職員)
設立：平成24年8月
従業員数：正社員4名(独立希望者2名含む)、パート9名、技能実習生3名 計16名
農地面積：畑16ha(うち施設0.6ha)
作付作物：露地野菜
長ねぎ、キャベツ、はくさい、にんじん、しょうが、だいこん、たまねぎ等
施設野菜
ほうれんそう、しゅんぎく等
※概要は、令和2年10月時点

野菜栽培(農業経営)

農地は、県営畑地帯総合土地改良事業東成井地区にあり、国営石岡台地総合かんがい排水事業により整備された霞ヶ浦用水を利用して、畑地かんがいをを行っています。

平成27年度に茨城県と行った長ねぎの点滴かん水栽培の実証試験では、かん水区は無かん水区に比べ、8月収穫で30%の増収、9月収穫で50%の増収、11月収穫で20%の増収となり、欠株が少なくなり、葉鞘茎が太くなる傾向となりました。また、労働時間やコストの削減にもつなが



長ねぎへかん水

りました。かん水は地温を低下させる効果が高く、高温時に温度を下げることで生育の安定にも繋がっていると感じています。

研修でも畑地かんがいを利用した栽培技術を指導していますが、まだ畑地かんがい用水が利用できる農地が少ないです。

販路は、9割以上が契約販売で、販売先はJAと競合しないようにしています。同じ販売先となった場合は、品目を変える等工夫しています。

また、JAやさとから独立した株式会社とすることにより、社長の判断で気象災害などの日々の状況変化にスピード感をもって作業計画等を判断できることは、大変良かったと思います。

研修から独立まで

研修生の応募資格としては、①年齢は40歳ぐらいまで、農業者としてやりとげる意志のあるもの、②研修終了後は、近隣市町村も含め八郷地区周辺で就農することがあります。

研修期間は、最大3年程度で、研修期間中に独立準備を行い、独立後すぐに農業を始められる体制が整えば、早期退社も可能です。研修では、農作業の技術習得(やさと菜苑が直接経営する農地で共に作業を行う。)、計画的農産物の生産方法取得

H27実証試験結果
上：無かん水区
下：かん水区



↑ かん水チューブの設置

	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	計
受入者数	2	2	2	1	2	1	3	13
新規就農者数	2	2	2	1	2	1	1	11

※令和2年10月時点、2名が研修中。
就農者の栽培作物
長ねぎ7名、なし1名、施設野菜3名

研修生の就農状況

研修生受入れの課題としては、①人数確保（新農業人フェアなどの参加、県内農業関連学校へ説明）、②地域

（契約販売の方法）、農地を有効利用した品質・生産性の向上方法の習得（農地の見極め・改善方法）等を学びます。
研修生の独立にあたっては、やさ」と菜苑の研修農地を暖簾分け（地権者と独立者が利用権設定）していただきます。暖簾分けにあたってはやさと菜苑がサポートしていくことで地権者からも信頼され、利用権設定がスムーズに進んでいます。現在まで、5・7haを暖簾分けしてきました。

の協力体制（就農後の生活・栽培技術指導）、③住居確保（農業をできる家）がありますが、現在まで、11人が新規就農しました。うち県外出身者は6名、県内出身者5名となっています。

新しい取組（農福連携）

令和2年度より、特定非営利活動法人どんぐりころころの就労継続支援B型事業所「しいのみ」と連携し、施設利用者に軽作業（こまつなの袋入れ作業など）を請け負って頂く取組を開始しました。やさと菜苑では、「人の手でやれることは人の手で」という理念のもと、施設利用者の就業機会の確保とともに、人手が必要な地域農業を支える人材として令和2年10月時点で4名が活躍しています。今後も地域の関係機関と連携を図りながら雇用を拡大していく予定です。



「しいのみ」でのこまつなの袋入れ作業



ハウスでほうれんそうを栽培



収穫した長ねぎの皮むき作業



高橋代表取締役

今後の目標
今後は、①かん水マニュアルの整理、②人手を増やし経営を行うにあたり、安定した生産量の確保のため、ハウスを増やし、露地・施設の複合栽培を展開、③商談会等に積極的に出展し、販路を拡大、④品質安定のためにも、畑地かんがいが利用可能な農地を確保していきたいと考えています。



袋入れの作業手順

設立経緯

J A やさと管内では、農業従事者が年々減少し、地域内に後継者は少ない状況がありました。しかし、「農業をやりたい人は必ずいる。」との思いから、地域内だけでなく、外に目を向けて新規就農者や後継者を育成することを目指し、J A やさと内に研修制度を作ることになりました。

一方、自然に配慮し、農業をずっと続けていける環境づくりや安全・安心な農産物づくりを目指し、J A やさと内に有機栽培部会を設置しました。

研修制度「ゆめファーム」は、この有機栽培部会と連携し、有機栽培を目指す新規就農者の育成を図ることを目的に、毎年農家が増え、継続的に農業が営まれる「夢のような研修制度を目指して設立しました。

研修制度は、農業外より本気で就農を自ら志す方を対象に研修生として受入れ、新たな農業参入者を育成

取材2 新規就農者の育成に向けた
有機栽培研修制度「ゆめファーム」
やさと農業協同組合

有機栽培部会事務局

酒井 健朗氏

することにより、JAやさとの有機農産物販売額の増加も目指します。

有機栽培部会の概要
 設立：平成9年度
 部会員数：29名(研修生含む)
 販路：JAやさとを通じて販売

ゆめファームの概要
 設立：平成11年度
 研修期間：2年間
 栽培作物：30～40種あり、主に、にんじん、だいこん、ねぎ、こまつな、きゅうり、レタスを栽培。

※概要は、令和2年10月時点

研修から独立まで

研修生の資格は、①既婚者で家族単位の応募で年齢は40歳ぐらいまで、②研修終了後は八郷地区で就農することがあります。

研修期間は2年間で、有機栽培部会の指導農家から有機栽培技術を学びます。研修農地は、有機認証済みの農地をJAやさとから無償提供されます。指導農家と言っても、研修生が学びたいことを自ら積極的に指導農家のもとへ行き、勉強するスタイルです。

栽培した作物は研修期間中も有機栽培部会を通じて、有機農産物として出荷します。研修生の場合、JAやさと担当者が生産工程管理者となり、出荷を手助けします。有機

栽培部会の販売は90%以上が契約販売であり、有機栽培部会で一緒に共同出荷することで、安定した販売が可能で

ます。研修期間中、独立後の農地を探し、JAS有機認証の準備を進めます。農地の確保については、JAやさと等がサポートし、地権者との利用権設定がスムーズに進むよう取り組んでいます。

有機栽培部会は、JAS有機の取得を入会の条件としており、独立後すぐに出荷できるように、研修時から準備を進めています。堆肥は、八郷地区の畜産農家より頂き、地域循環を目指しています。

これまでに、研修したのは20家族で、就農も20家族でした。その後、3家族が離農(いずれも親族、家族の事情による)し現在、17家族が有機栽培農家として活躍しています。有機栽培部会の平均年齢は約44歳と全国的な平均年齢に比べると、大変若い農家が多いです。

現状では、畑地かんがい用水が利用できる農地が限られており、独立後に井戸を掘る農家もあり、畑地かんがい用水が使えるようになれば、畑地かんがい用水を利用した栽培の選択肢もでてくるのではないかと考

えています。

今後の目標

研修制度は、約20年が経過しますが、その間、研修用の農地は休む暇がありませんでした。線虫の被害と思われる規格外品も増加傾向にあり、新たな研修用の農地を確保し、農地をローテーションできる体制を作りたいと考えています。



ゆめファーム



酒井氏

有機農産物とは？

種まきまたは植付前2年以上の間、化学物質に汚染されていないことを第三者機関によって確認された畑で、化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないで生産された作物のことをいいます。

ただし、病害虫被害で全滅の恐れが生じた時などやむを得ない状態に使用を許されている農薬がありますが、JAやさと有機栽培部会では健康な土づくりを行って病気に負けない元気な作物を育てることで、緊急事態を回避する努力をしています。また、毎年1回第三者機関により検査(有料)を受けています。

1年に1家族を受け入れ、常に2家族が研修

1年に1家族増加

研修制度
ゆめファーム

先輩農家が技術指導

部会員として野菜を出荷

2年の研修後、地域の生産者に

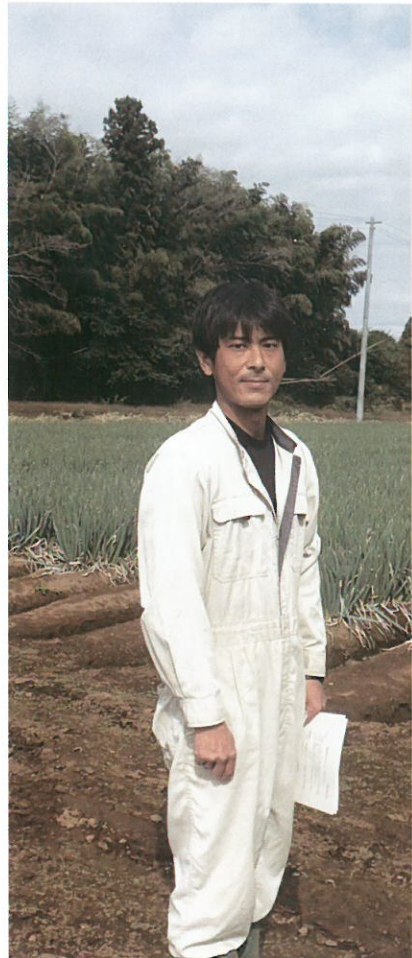
JAやさと
有機栽培部会

↑ ゆめファームと有機栽培部会の関係

取材3

じっくりと時間をかけ、長ねぎ栽培を安定させていく

やさと菜苑(株)卒業生 小野 記央氏



就農のきっかけ

小野さんは、茨城県日立市の出身、育った地域は工業のまちで、自然の山河は少なかったそうです。

大学では工学部で電気電子工学を学び、半導体メーカーに就職しました。当時は「社会に進歩をもたらす有意義な仕事」との思いで、働きました。

しかし、次第に疑問を抱き始め、「ひとが生きるために真に必要なことをやりたい。つきつめれば衣食住だ。その中でも最も重要と思う「食」の原点でもある生産に強く惹かれた。」ということでした。30歳を前に、これまでのキャリアを捨て、農業の道を志しました。

やさと菜苑との出会いと研修

農業を志したものの、まずは農業が自分にあっているのか確かめようと、山形県の農業法人で働きました。自然と向き合う仕事は新鮮で面白く、しばらく続けても農業への思いは変わらなかったことから、この道で生きていくことを決めました。

その後、生まれ育った茨城県での就農を目指し、農業を一から学ぶため、茨城町の農業大学校に入學し2年間学びました。

2年目の夏に、「担い手育成に力を入れ、農地集積しながら行われる大規模農業を見てみたい。」との思いから、やさと菜苑を長期派遣実習先に選びました。

やさと菜苑での実習の中で、やさと菜苑で働く皆さんの人柄、石岡市の素晴らしい自然環境に感銘を受け、実習時に「農業大学校を卒業後、ここで研修させてもらいたい。」とやさと菜苑の社長にお願いしました。卒業後、石岡市内に移り住み、やさと菜苑の農業研修生となりました。

やさと菜苑では1年9ヶ月、長ねぎの栽培を学びました。

就農(独立)

やさと菜苑での研修を終え、平成28年度に就農しました。就農にあたっては、やさと菜苑の農地の一部を暖簾分け(地権者と利用権設定)して頂き、露地で長ねぎ栽培を開始しました。

やさと菜苑では、畑地かんがいによる栽培技術も学びましたが、1人での農業のため、水は育苗用として活用しています。今後は、露地で長ねぎの他ににんじんの作付けも予定しています。

長ねぎは加工用として、JAやさとの野菜カットセンターへ出荷しています。

研修から就農までを振り返り、「無事に就農することができ、やさと菜苑とJAやさとはとても感謝している。地域外の間人がスムーズに就農することをサポートしてくれる制度は他にはないと感じている。」とのことでした。

今後の目標

今後の目標は、「じっくりと10年かけ、長ねぎ栽培を安定させていきたい。そして、少しずつ品目(まずはにんじん)を増やしていきたい。」とのことでした。

JAやさとの野菜カットセンターは、平成28年度に稼働を開始しました。企業向けのカット野菜生産が主な目的です。小野さんを始め、やさと菜苑から独立した生産者が、野菜カットセンターを支える主要な戦力となっています。

プロフィール

おの のりひさ
氏名： 小野 記央
出身地： 茨城県日立市
就農(独立)時期： 平成28年度
主な栽培作物： 長ねぎ
作付面積： 畑1.2ha(露地)
労働力： 1名(本人)

※令和2年10月時点

取材4

研修が終わりこれからが本番！ ハウス栽培を軌道にのせる

やさと菜苑(株)卒業生 越川 敦氏



就農のきっかけ

越川さんは、千葉県佐倉市出身で、東京でサラリーマンをしていた。サラリーマンとして働く中で、「一次産業に関わりたい。その中でも農業をやってみたい。」との思いが募り、農業を志しました。

やさと菜苑との出会いと研修

農業を行うにあたり、研修制度がないか調べていたところ、茨城県は、県外からの受入体制が整っている印象をもちました。そこで、茨城県農林振興公社へ相談したところ、やさと菜苑を紹介して頂きました。最初は、東京でサラリーマンをしながら、週一回やさと菜苑へ作業体

験へ行っていました。それまで、農業の知識はありませんでしたが、農作業が楽しく、「農業で生計を立てる。」と決心して、やさと菜苑の研修生となりました。

研修は2年間行い、1年目は長ねぎを栽培し、2年目にハウスでほうれんそう、こまつなを栽培しました。独立にあたっては、2年目に学んだハウス栽培を始めることにしました。

ほうれんそう、こまつなの研修では、かん水チューブを用いた栽培技術を学びました。学んだ技術を活かしながら、かん水のタイミングやかん水の時間は自分なりに工夫しながら栽培を行っています。

就農(独立)

やさと菜苑での研修を終え、令和2年1月に就農しました。就農にあたっては、やさと菜苑の農地の一部を暖簾分け(地権者と利用権設定)して頂き、ハウスは石岡市の助成金を活用しながらハウスでのほうれんそう栽培を開始しました。

暖簾分けして頂いた農地は、まだ畑地かんがい用水が届いてなく、ハウス建設と併せて井戸を掘りました。

かん水については、「就農して間もないため、まだかん水の効果を明確には実感できていないが、ハウス栽培ではかん水が必要のため、畑地かんがい用水が多く、農地で使えるようになればいいと思う。」とのことでした。

ほうれんそうの作付けは、令和2年5月から行い、年6回収穫する予定で、JAやさとを通じて、スーパーマーケット等へ出荷しています。「まだ作付けして間もないため、安定した栽培が目標。今後はこまつなの栽培も予定している。」とのことでした。

研修から就農までを振り返り、「就農にあたり、道筋をつけてもらえたことに感謝している。トラク

ターの運転など基礎的な技術からやさと菜苑で学べたことは、その後の栽培に大変役に立っている。」とのことでした。

今後の目標

今後の目標は「就農して日が浅く出荷量が安定してないため、先ずは必要数(ロット)の確保を目指す。その上で、販路拡大を行いたい。」とのことでした。

まだ、JAの生産部会等には所属してなく、やさと菜苑と情報交換しながら作業をしているとのことでした。「今後は地域内の横のつながりも作りながら、ハウス栽培を軌道にのせたい。」と語って頂きました。

プロフィール

こしかわ あつし
氏名： 越川 敦
出身地： 千葉県佐倉市
就農(独立)時期： 令和2年1月
主な栽培作物： ほうれんそう(周年栽培)
作付面積： 畑15a(施設)
労働力： 1名(本人)

※令和2年10月時点

取材5

家族で安全・安心な有機栽培に挑戦

ゆめファーム卒業生 森 宗一氏



就農のきっかけ

森宗一さんは、静岡県焼津市出身、東京で6年間料理人として働きました。後に営業職へ転職しましたが、今後の人生を考えた際、「人混みが苦手で、体を動かす仕事がない。そのとき、料理人時代を感じた『野菜づくりをしてみたい』という思いが蘇った。」そうです。

当時同棲していた妻（早織さん）に農業をやってみたいと相談したところ、東京の生活に疲れていたところで、もともと岩手県出身で都会に慣れることができなかったこともあり、農業を営むことに大賛成しました。

ゆめファームとの出会いと研修

二人で就農するにはどうすればよいか調べ始め、東京で行われている就農相談会「新・農人フェア」へ行き、そこで「ゆめファーム」を知りました。

翌週には見学を申し込み、直接現地を見に行きました。初めは二人の出身地のちょうど中間地点ということで興味を持ちましたが、石岡市のすばらしい環境と研修内容を知り、「ここで農業に挑戦したい。」と思い、研修生に応募したそうです。ゆめファームの応募条件が夫婦だったため、すぐに結婚も決めました。調べ始めてから、ほぼ半年で石岡市へ移住しました。

研修では、指導農家や一年先輩の研修生に教わりながら、ひとつひとつ農業を覚えていく日々がとても充実していたそうです。

有機栽培がやりたくてゆめファームを選んだというわけではありませんでしたが、「農業を使用しない栽培のため、体への負担が少なく、安全・安心な野菜を供給できることは、有機栽培を始めて良かったと思う点。」とのことでした。

就農（独立）

ゆめファームでの研修を終え、平成28年度に就農しました。

農地は、やさと菜苑の高橋代表取締役、有機栽培の条件に見合う農地を探して頂き、利用権設定もスムーズに進みました。また、農地を借り栽培を開始したところ、周辺の地権者から「他の農地も借りないか。」との話を頂き、現在の225aまで面積を拡大してきました。

畑地かんがい用水はまだ農地まで届いてなく、一部の農地では既存にあった井戸を活用して、乾燥防止としてかん水利用しています。

栽培した野菜は、有機農産物として、JAやさと有機栽培部会を通じて出荷しています。

研修から就農までを振り返り、「人生が大きく変わり、そして暮らしが豊かになった。本当に農家を目指して良かった。それから、この素晴らしい環境と仲間に出会えたことに感謝している。」とのことでした。

今後の目標

今後の目標は「仕事の目標としては、営農の安定。品質の良いものをつくりながら、安定した収入が得られるような農業を目指す。」「それと、仕事・子育て・家族の時間のバランスをとって、夫婦で協力しながら農業を営みたい。」「果菜類の畑では、水を運ぶ労力を考えると、畑地かんがい用水が使えるようになればぜひ使用したい。」とのことでした。

就農してからは、有機栽培部会を支える戦力として、活躍されています。

プロフィール

氏名： 森 宗一
出身地： 静岡県焼津市
氏名： 森 早織
出身地： 岩手県雫石町
就農(独立)時期： 平成28年度
主な栽培作物： きゅうり、こまつな、にんじん、長ねぎ、さといも、だいこん
作付面積： 畑225a (うち施設2.3a)
労働力： 2名(夫婦)

※令和2年10月時点

九州管内の畑地かんがい営農取組 地区を訪ねて

大野川上流地区若手農業者との 意見交換会

大野川上流地区は、昭和53年度から令和元年度にかけて、国営かんがい排水事業を実施し、農業用水の安定供給及び営農の合理化を図ってきました。



↑意見交換会の模様は、竹田市ケーブルテレビで放映



↑若手農家の皆さんと知事、局長など
下段中央：広瀬大分県知事
下段左から2人目：横井九州農政局長

本事業で築造された大蘇ダムは、令和2年4月から本格運用が開始されたことから、地域営農の更なる振興のため、令和2年9月10日、大分県竹田市荻福祉健康工

場において、今後の活躍が期待される若手農家7名と広瀬大分県知事、横井九州農政局長による意見交換会を大分県の主催で開催しました。

意見交換会では、大蘇ダムの水を利用した農業や地域の未来像、今後の目標や課題について語り合いました。

九州農政局では、頂いた意見を踏まえ、今後とも本地区の営農推進支援を行って参ります。

都城盆地地区スマート農業の取組

令和元年度開催の「国営土地改良事業地区営農推進担当者研修会（第1回）」で紹介した都城盆地地区の取組の中で、令和2年9月2日に（有）太陽ファーム、令和2年10月12日に（有）新福青果のスマート農業（※）の取組について、現地調査しました。

太陽ファームは、令和2年度よりスマート農業の取組として、自動畑地かんがいシステムを導入した野菜栽培等を開始しています。土壌水分や気温などのデータを採取・分析して、かん水に活かしていくとのことでした。

新福青果は、ロボットトラクター、自動操舵補助トラクターを取り入れた農業に取りくんでいます。それらのトラクターがあれば、入社1年目でも熟練技術者と同等の作業ができるのが利点とのことでした。また、ドローンにより撮影した農地写真をスマートフォンで共有することにより、除草等の作業計画に役立てているとのことでした。

【太陽ファーム】

土壌水分等のデータを採取



【太陽ファーム】

現地調査時は、土壌水分データ等を基にした自動かん水を検討中



【新福青果】

ドローンで撮影した農地写真を確認



【新福青果】

タブレットで操作するロボットトラクター



※太陽ファーム、新福青果とも、農研機構のスマート農業実証プロジェクト対象地区。

編集後記

「みのり21」は、農業生産基盤整備の実施と営農者・指導関係者の皆さんのご努力が、21世紀の九州農業に大きな「実り」をもたらすことを期待して命名したもので、平成3年の初発行から数えて今回で第59号となりました。

今後もタイムリーで役立つ情報提供に努めて参りたいと思いますので、誌面に対するご意見・ご要望や現地情

報等を、お気軽に編集事務局までお寄せ下さい。

また、九州農政局のホームページには、色々な農政情報を掲載していますので、こちらも活用下さい。

九州農政局ホームページ →

